

異文化コミュニケーション研究所

2008 年度活動報告

(1) 新刊本紹介

- 奥島美夏 編著 『日本のインドネシア人社会——国際移動と共生の課題』明石書店

本書は神田外語大学異文化コミュニケーション研究所共同研究プロジェクト「日本のインドネシア人社会」（2004～06 年度）に基づき、同研究所主催のワークショップと雑誌で発表された学際研究の成果集である。本書の構成は、「日本で学ぶ」「日本で働く」「日本で暮らす」「アジア太平洋に広がるインドネシア人の移動・就労」の4部に分けられ、序章を含めて14本の論文及び5本のコラムが収録されている。

入管協会発行の在留外国人統計によると2007年末現在、日本における外国人総数は215万人であり、うちインドネシア人は約2.6万人となっている。これに資格外就労者や船員を含めると4万人前後になる。インドネシア人の流入が加速化し始めたのは1990年代からであり、1万人以上が定着したのは2000年以降のことである。在日インドネシア人の傾向としては、労働者中心、関東・中部地方への集中、最近の日本人との国際結婚や留学生・日系人の増加、などが挙げられる。本年度は日本・インドネシア経済連携協定（EPA）に基づいて看護師・介護福祉士候補も来日しているものの、日本側は統一的な教育システムや労働条件を整備しきれていないのが現状であり、3～4年後には彼／彼女らに国家資格取得が義務付けられていることも忘れてはいけない。

本書の目的は、上記のように日本で学び、働き、暮らすインドネシア人の抱える諸問題、並びに両国の政策転換期を迎えて彼らが直面している現状を明らかにするものである。各論考では、研修生や主婦の抱える問題、

日系人の親族組織に依拠した就労構造、宗教や芸能など自助組織の活動、そしてインドネシア本国の労働者送出制度の改革など、グローバル化現象の一つである人の移動に伴って生じた今日的課題を多角的に検証している。多文化・多民族であるインドネシア人の国際移動を深く掘り下げること、異文化理解とは何かを考え、また日本の多文化共生社会を実現するためにも欠かせない考察であると考え。

(伊藤雅俊・日本大学大学院国際関係研究科博士課程)

(2) 研究プロジェクト紹介

●「東アジアの経済統合をめぐる人の移動」(継続)

代表: 奥島美夏(本学異文化コミュニケーション研究所・講師)

〈研究概要〉 これまでの在日インドネシア人研究、および昨年度の台湾・インドネシア共同調査の成果をまとめ、明石書店より『日本のインドネシア人社会——国際移動と共生の課題』と題して刊行した(上記(1)参照)。また、北関東・中部地方などのインドネシア人を含む在日外国人調査を個々に継続しているメンバーと情報交換などを随時行った。

なお本年度より関連プロジェクトとして、文部科学省科学研究費補助金(基盤B海外、課題番号20401047)「東アジアにみるインドネシア・ベトナム女性移民の急増と家事介護労働者—花嫁間の推移」(研究代表者: 奥島美夏、平成20~22年度)も開始している。

●国際文化振興会と「幻の英文日本百科事典」(継続)

代表: 和田 純(本学異文化コミュニケーション研究所・所長、国際コミュニケーション学科・教授)

〈研究概要〉 関連資料の収集・分析を継続している。

●戦後日本の国際交流と文化外交（継続）

代表：和田 純（同上）

〈研究概要〉 近年のものまで含めて資料の整理・分析を継続している。

(3) 調査プロジェクト

●国立公文書館アジア歴史資料センター委託「日本国内所在の主要アジア歴史資料」（継続）

代表：和田 純（本学異文化コミュニケーション研究所・所長、国際コミュニケーション学科・教授）

〈調査概要〉 委託調査の3年目として、和田と土田宏成（本学国際コミュニケーション学科准教授）のチームに諸大学から講師・大学院生の参加を得て、国内の国・自治体・大学・研究所・公益法人・企業・民間団体などの所蔵資料を調査した。

調査結果は、順次、アジア歴史資料センターのホームページの「国内所在史料調査報告書」（<http://www.jacar.go.jp/houkoku/houkoku.html>）からPDF ファイルで公開されている。

(4) 学内講演会報告

●第54回（11月4日）「記憶の表象——ヒロシマ・ナガサキを考える」

青沼 智（本学国際コミュニケーション学科教授）

シルビア・ゴンザレス（本学スペイン語学科准教授）

ギブソン松井佳子（本学異文化コミュニケーション研究所・副所長、本学英米語学科教授）

本講演は、昨年度第50・53回講演会でとりあげた広島・長崎の原爆問題の反響を踏まえて、論議をさらに深める目的で再びとりあげたものである(『異文化コミュニケーション研究』20号、198-199、201-203頁参照)。

記憶は時とともに薄れ、戦争と原爆投下の事実ですら日常の中へと吸い込まれてしまうが、人間の歴史には忘れてはならないこと、決して風化させてはいけないことがある。だが、まさにその筆舌に尽くしがたい惨劇のために、原爆投下直後から約60年にわたる北南米・日本のメディアにおいて、さらに1995年に米国スミソニアン航空宇宙博物館で企画された第二次世界大戦終結50周年記念の「エノラゲイ」展示においても、さまざまな方向から直截的かつ総合的な描写・情報伝達を阻む力が働いていたことは上記2講演会ですでに報告された。

今回はこの圧力について、まず青沼氏が個々人の記憶と、社会的に共有される集合的記憶のレベルから解説した。いずれのレベルでも、人間は都合の悪いことをなるべく語らず、忘れようとする傾向がある。その結果、米国某高校のフットボールチーム「ボンバーズ」や日本のプロレス技「原爆固め」、あるいは有名な手塚治虫のロボット漫画『鉄腕アトム』など、「力」「破壊」「一撃必殺」といったイメージをポジティブな文脈で引用する例は数多く登場したが、肝心の一都市の壊滅や被爆者の苦悩については非常に限定的な言説のあり方にとどまるという現状を生み出したのである。

次に、当然ながらこうした状況に拍車をかけた制度的圧力についてゴンザレス氏が報告した。原爆投下は本来「20世紀最大のニュース」となるはずであった大事件であったにもかかわらず、実際は米国を中心とする諸圧力団体が全面的に報道を規制・検閲し続けたため、誤った情報とイメージが世界中に氾濫してきた。こうした問題に携わる各国のジャーナリストたちは、真実を知るために独力で調査を続け、一般市民にも自覚・社会参加を促すことに精力を注いでいる。ジャーナリズムにとどまらず、より広く影響力を及ぼすことができる文芸分野においても、例えばガルシア・マルケスやノーベル文学賞受賞者のホセ・サラマゴ、岡本太郎などの文学、サルバドール・ダリなどの絵画、シルビオ・ロドリゲスなどの音楽などが、フィクションや想像力を織り交ぜることによってより鮮明に、そしてより

身近に原爆問題をとらえ訴えることに成功している。

原爆の記憶を風化させてはならない理由には、それが厳然たる史実であるためばかりでなく、今や格段の威力を備えた核兵器が世界の争点となっているためでもある。私たちは未解決の課題を把握し、再検討することによって、将来への教訓を引き出し続けなければならない。

●第 55 回 (12 月 8 日) 「サイボーグ技術と人間の未来」

松田 純 (静岡大学人文学部教授)

世界の先進諸国が次々と高齢化社会へ突入するにつれ、問題の山積する医療・介護分野ではサイボーグ技術への期待が高まっている。人工内耳、人工網膜、脳深部刺激療法などによって画期的な治療効果をもたらされ、一部はすでに保険も適用されるようになったため装用者は 1990 年代から急増している。この 1、2 年でメディアの話題となった筑波大学のロボットスーツ「HAL」や早稲田大学の人間型介助ロボットなども、今しばらくは高価だが、いずれ福祉現場や家庭に導入される日が来るといわれている。人間の脳にコンピュータを直結する技術がすでに実現し、脳がインターネットに直結する可能性もみえてきた今、アニメ『攻殻機動隊』やハリウッド映画『MATRIX』の世界はもはや SF ではないのだ。

だが講師の松田氏は、サイボーグ技術は医療や福祉に福音をもたらすだけでなく、人間のありようを根底から変える可能性もはらんでいることを指摘する。脳科学がかつては人文科学や宗教の独断場であった「精神的な価値」の解明に迫ろうとしているからだ。例えば、深部脳刺激療法 (DBS) は、うつ病などの精神疾患や麻薬などの中毒症状に対しても有効であるが、人格変容などをめぐる倫理問題について検討する必要がある。ひとまず現段階では、「非道具化」(身体や脳を他者が操作・コントロールすることの禁止) やプライバシーの保護、インフォームド・コンセントなど、2005 年の EU 科学と新技術の倫理に関するヨーロッパ審議会で提案された「人間の尊厳」原理に基づく 6 つの配慮項目がめやすとされている。

また、サイボーグ技術の「エンハンスメント (機能強化・技能向上) 的」

利用は治療にとどまらず、「より望ましい子供」や「不老の身体」、(人為的に調整された)「幸せな魂」などを追求したいという人間の欲求にどう対処するのかという問題にも直面する。さらに、こうした最先端技術の常として、米国などではサイボーグ技術の軍事利用なども試みられている。こうした技術が極まると、肉体が人為的にデザインされるだけでなく、記憶まで外部化されて一個人のアイデンティティを揺るがし、人間を人間たらしめている「心」とは何かという疑問にゆきつく。『攻殻機動隊』の主題である Ghost in the Shell (甲殻の中の幽霊)はその回答として生まれてきた概念であるという。

近年の遺伝子研究では、人間と霊長類の間に決定的な差異がほとんどなく、明確な境界を引くのが難しいことがわかっている。同様に、再生医工学でも「人間らしさ」あるいは「人間性」の境界は今後ますます曖昧になり、人間／サイボーグ／機械の比較が重要な関心となるだろう。また、技術の発展につれて総合的な人格形成や他人への依存度が薄れ、機械への依存や身体モノ化が高まるなど、人間社会そのものの変容も危惧されている。

〈参考〉

- 松田 純 2005『遺伝子技術の進展と人間の未来——ドイツ生命環境倫理学に学ぶ』知泉書館
- 生命環境倫理ドイツ情報センター 編(松田純ほか共訳) 2007『エンハンスメント——バイオテクノロジーによる人間改造と倫理』知泉書館